

日本語「係り結び」の原理と印欧語

日本語には、主語と述語とにおける数形式の一致に相当する印欧語的現象はない、というのが常識だが、ほんとうだろうか。印欧語の動詞は主語の数によって規定される、という意味で、この関係は支配関係である。文法とは一言で言うと、語と語との間にある支配・被支配関係のことだが、この「支配」とは論理の力ではなく、主部と述部の間にバランスを保とうとする力による。印欧語の数的一致は、最初は荒けずりの語のつながりが、だんだんと音（形）と意味とのバランスがとれ、成熟していった一つの表れである。言葉はまず音声による表現であり、洗練された表現には主語と述部のリズムの均衡を必要とした。古い言語の一つの起源がこうした音楽的なものであったことは疑いを入れない。ホメーロスの作品は韻文であり、セイレーンは歌声でオデュッセウスを誘惑しようとしたが、こうした神々の歌そのものが当時の実際の言葉だったのではないかと私は考えている。

日本語の古典的特色としてあげられるもののなかに「係り結び」がある。河野六郎先生によれば「これは、係助詞と述語用言の活用形の対応関係であり、文法論的に言えば支配（government）の一種である」。「ぞ（そ）、なむ、や、か」という助詞には連体形が、「こそ」には已然形が対応するが、この現象の根源にあったものは主部・述部間のリズム的均衡への配慮だったのではないだろうか。

つまり主語を強調した場合、それに応じて述部も強調する必要があったし、主部を無強勢で提示した場合は、述部も無強勢のままにしておいたのである。「別れ（は）悲し」であるが、「別れぞ」と強調した場合、「悲しき」と連体形にして述部を強勢しておかないとバランスが悪い。指示代名詞は一般に強勢に用いられ、助詞の起源になっているものがあるが、形容詞ク活用に用いられるカ行音は、指示詞カ、ク、コが起源であるという有力な説もある。

また動詞の連体形は詳しくは後述するが、連用形（名詞）に存在動詞 *wu*（居る、の語根）が二重に付いたものが連体形（*過ぐ sugi+wu > sugu > sugu+wu > suguru*）であるとすれば、これまた終止形の強調にはかならない。「こそ」は指示語「こ」と「そ」が合わさったものであり、「ぞ、なむ」より語勢が強いので、述部での連体形による強勢では不十分で、「別れこそ悲しけれ」と已然形（上代

ではまだ連体形、悲しき) を用いるのである。

印欧語には人称と数の区別で、動詞にはふつう、六つから九つの変化があったが、係り結びの観点からすると、日本語の支配される述部には終止(無強勢)、連体(強勢)、已然(再強勢)の三つの種類があった。主部と述部との間に均衡をとる力がはたらく、という意味で、印欧語における主部と述部との数の一致と、係り結びとは根本的には同質の文法現象なのである。本書第七章では日本語の動詞変化を考えるが、日本語の動詞活用の生成には、こうした主部との均衡という要請もあったに違いない。

(『日本語はどこから生まれたか』ベスト新書 2005年5月、第二章より)